

【個人研究】

女性のスピリチュアリティ

「カエルの王さま」のユング心理学的解釈

土 沼 雅 子*

**Understanding “Frog King” in a Jung Psychological View
Women’s Spirituality**

Masako DONUMA

Fairy tales may be understood as a process of soul from a depth Psychological perspective. In this essay, I discussed how a girl in adolescence grows as a feminine through interpretation of the Great Mother nature and sexuality for the discovery of the feminine nature .

In addition, a most beautiful princess faces ugliness within her, confronts the rule and authority of the masculine, and saves frog .

Furthermore, a girl integrates the Animus, develops sexuality and the Eros, and grows as a mature woman. I examined in depth the meaning of a woman’s anger in the climax of the fairy tale.

No study on the fairy tale has been conducted in this viewpoint .

I explored the meanings of symbolic representations of the objects, images, and symbols expressed in the fairy tale using the same method of dream interpretation .

べている。

1. はじめに

物語（メルヘン）は深層心理学的立場からみれば、こころのプロセスとして理解することができます。ユング派はメルヘンに大きな関心を寄せ、物語解釈をしてきた。マリオ・ヤコービ（2002）によれば「メルヘンでは人間のファンタジー、というより精神生活そのものに対する無意識な、ユングによれば『元型的な』コントロールが、はっきりと見られる。メルヘンの登場人物およびその布置は、すべての個人的なまといをはぎ取られており、それゆえそれらについての典型的な描写の中に、無意識の過程を読み取ることができる」と述

筆者は「女性のスピリチュアリティ序説」（2002）において、「アーサー王伝説 ガウェイン卿と忌まわしい婦人」の物語をとりあげ、女性性の回復について述べた。今回は思春期の女性がどのように一人の女性として、成長していくのかをグリム童話の「カエルの王さま」を取り上げ、ユング心理学的解釈を加えつつ、考察してみたい。なぜ、この物語なのかというと、「美女と野獣」に代表される動物花婿物語は「ノロウェイの黒い雄牛」「太陽の東と月の西」「魔法にかけられた豚」その他多いが、そのほとんどの物語においては、お姫さまが、動物にキスをしたり、愛情を示したり、求婚することによって動物の魔法がとけるものである。しかし、「カエルの王さま」に

* どぬま まさこ 文教大学人間科学部臨床心理学科

おいては、女性の怒り、それも激怒といえる激しい怒りによって、魔法が解けるのである。この点についての、明確な解釈が、なされてはいない。

織田尚生（1998）は、「民話と怒り」の節において、「蛙の王様」をとりあげ、「押しつけによる怒り」であると解釈をされている。また、鈴木研二（2004）は、一寸法師の成長と打出の小槌の分析のなかで、「グリム童話の『蛙の王子』も似たような型の話であると見られるが」と2行ほどふれているのみである。藤見幸雄（1999）は男性の立場から、お姫さまを自己愛的人間として、カエルを男性のマザコンからの自立ととらえているが、怒りの肯定的意味は明確ではない。筆者は女性の立場で、この物語を末娘のお姫さまを主役に設定し、思春期女性のこころの成長過程という視点で解釈し、怒りの建設的意味、女性のスピリチャリティにおける女性性の回復という視点からより深い解釈・考察を提示したい。ヴェレーナ・カースト（2002）は「メルヘン解釈のための方法論に寄せて」の小論のなかで、メルヘン解釈は集合的な面と個人的な面の二つの面から解釈することができると述べている。ここでは、この二つの面から解釈していくことになる。方法はユング心理学理論を使い、夢分析と同様に拡充法を用いて、記述的、象徴的解釈とする。

2. ストーリー

野口（1994）によれば、グリムのメルヘン集のなかで「カエルの王さま」は「カエルの王さままたは鉄のハインリッヒ」という題名で1812年の初版から1857年の決定版まで、つねに一番最初におかれた。このことは、グリム兄弟がこのメルヘンに対して、一方ならぬ愛着を持っていたということを示すものといえる。

このメルヘン（初版 1997）を筆者は次のように要約した。

くむかしむかし、まだどんな人のぞみでも、思いどおりにかなったころのことです。ある

ところに、ひとりの王さまが住んでいました。その王さまにはたくさんのお姫さまがいましたが、とくに末のお姫さまはお日さまさえ、びっくりしてしまうほどでした。このお姫さまは、森へ出かけていって、すずしい泉のほとりに腰をおろし、金のまりを高くなげてあそぶのが好きでした。ある時、まりがころころと転がって、そのまま水の中に沈んでしまいました。泉はとても深く、底まで見えません。お姫さまは悲しそうに泣き出しました。「あのまりを取り戻せるなら、なんでもあげるわ。服でも、宝石でも、真珠でも、この世界にあるものならなんでもあげるわ。」すると一匹のカエルが水の中から頭を突き出して言いました。「あなたの真珠も宝石もいりません。わたしを友達にしてください。あなたの金のお皿で一緒に食べて、一緒に寝て、わたしを大切に思い、愛してくれるなら、金のまりをとってきましょう」と。お姫さまはどうせ馬鹿なカエルの言うことだと思い「ええ、いいわ。全部約束をしてあげるから」と言いました。カエルは水にもぐっていきました。そしてまりをくわえてきて、返してくれました。お姫様は大喜びで、カエルを置き去りにして帰ってしまいました。次の日、ぴちゃぴちゃんと階段をなにかがのぼってくるのが聞こえました。お姫さまが戸を開けると、あのカエルがいました。王さまは「約束したことは守らなくてはいけない」と言いました。カエルは中へ入ると、「あなたの隣の椅子に上げてください」と言いました。お姫さまはいやでしたが、王さまがそうするように命じました。カエルは「あなたの金のお皿から一緒に食べたい」と言い、お姫さまはそれもしなくてはなりませんでした。カエルはおなかいっぱい食べると言いました、「わたしをあなたの部屋へ連れて上がって、あなたのベッドへ一緒に入りましょう」。お姫さまは、驚きました。冷たいカエルが恐ろしかったのです。さわるのだっていやでした。一緒にベッドで寝なくてはいけないのでした。お姫さまは泣きました。すると王さまは怒って、約束したことは

守るように命じました。どうしてもお姫さまは、王さまに従わなくてはなりませんでした。けれども心の中ではひどく腹を立てていました。お姫さまは、二本の指でカエルをつまみ上げると、二階の部屋につれていって、すみっこにおきました。またもやカエルが「わたしをベッドにあげてください。そうしないとお父さまに言いつけますよ」それをきくと、お姫さまは本当に怒ってしまいました。そしていきなりカエルをつかみあげると、ありつたけの力をこめて、壁にたたきつけました。「さあ、これでやっと静かにさせてもらえるわ、いやらしいカエル！」

けれども、下に落ちたカエルは死んではいませんでした。ベッドへ落ちると、美しい若い王子になっていました。王子の身の上話によりますと、王子は、あるわるい魔女のために、魔法をかけられていたのです。王子はいまや、お姫さまのお気に入りの若者でした。そしてお姫さまは約束したとおり、王子を大切にしました。そして、ふたりは喜んでいっしょに眠りました。そして、朝になると羽で飾りたてられ、金色に輝く、八頭の馬にひかれた立派な馬車がやってきました。そこには、王子の忠実なしもべハインリッヒが乗っていました。ハインリッヒは、王子がカエルにされたとき、それは悲しみました。その悲しみのあまり心臓がはりさけないように、胸のまわりに三本の鉄の輪を巻かねばならないほどでした。王子は、お姫さまといっしょに馬車になりました。忠実なしもべは後ろに立ちました。そろってわかい王さまの国に向かいました。道を少し行くと、わかい王さまの後ろのほうで、なにか大きなはじける音が聞こえました。そこで若い王さまはふりかえって、大声に言いました。

「ハインリッヒ、馬車がこわれたぞ」
「いいえ、ご主人さま、馬車ではありません。
わたしの胸輪です
あなたがカエルになったとき
泉に沈んでいかれたとき

かなしみ なげいて
はめた わたしの胸輪です」

もう一度、そしてもう一度、わかい王さまははじける音を聞きました。わかい王様はばしゃが壊れたのかと思いました。けれどもそれは、主人が魔法からすぐわれて、幸せになったので、忠実なハインリッヒの胸からはじけとんだ胸輪の音でした。>

3. 森と泉

森はメルヘンにはよく出てくる。「ヘンゼルとグレーテル」や「赤ずきん」にも森が大きな意味をもっている。宮田光雄（1993）は「森というのは、いつでも計り知れないほど大きく、深いなぞにみちたところです。メルヘンの主人公たちは、きまつて森の中で道に迷い、不安に陥ります。しかし、やがて自分を鍛えあげ、賢さを身につけ、自分自身を発見するにいたるのです。こうして森というのは、物語の背後に秘められた重大なできごとがあここところの舞台なのです。」と述べている。ユング心理学では森は暗く、無意識的世界や、母親のイメージとかかわっているとされる（秋山さと子 1982）。森には魔女が住むとされることも多い。このメルヘンでも森は重要なカエルとの出会いの場所であり、イニシエーションが動き出す舞台である。

王さまのお城は美しい娘たちが住む明るい場所であり、日常の場である。しかし、その近くには、大きな暗い森が存在している。涼しい暗い森は、影の世界であり、非日常を暗示している。そこには古い菩提樹がたっている。木は、一般に生命の象徴であるとされる。その他、成長、保護、豊穣などを意味することがある。世界の神話や、鍊金術などでは天と地、男性と女性を結ぶシンボルとされることがある。とくに菩提樹は高い精神性、悟りの境地、父性や包容力、生命の拠り所を象徴しているとみることができる。そしてその木の下から泉がこんこんと湧き出しているのである。泉は無意識の生命力が湧き出している場である。泉に触ると病がいやされる

イメージがある。また、うるおい、清らかさ、魂、エロス、官能性が連想される。秋山さと子(1982)は「清らかな泉は、無邪気な童心、処女性のシンボルである」としている。筆者が読んだ英語版では「well」井戸になっていた。井戸はやはり、無意識との通路であり、危険もあるが、大切な象徴である。ただ、まだお姫さまには泉は深くて、底は見ることができないのである。ということは、お姫さまは、豊穣な泉の水や、大地的な、母性的なもの自らの内面において発達させねばならないということを暗示している。いよいよ無意識の世界が始まるということを示しており、このお姫さまのイニシエーションのはじまりの場面設定がなされたといえる。

4. お姫さま

このお姫さまは、たくさんの美しい姉たちのなかでも一番美しい末娘とされており、王さまが一番愛した娘である。13、5歳くらいだと推測できる。太陽でさえまぶしがるほどの輝きを持つ娘は、人間を越えた極端な美の持ち主であり、神話のブシケーを思い出させる。このお姫さまも、女神になる素質を持つとも考えられる。さらに、姉たちとは違って、時々、独りになって森に入り、泉のそばで瞑想状態で、内的世界と遊ぶことのできる魂をもった、スピリチュアルな面を備えたバランスのとれた少女ができる。ただ、この少女は、父親の王に、溺愛された、父のお人形さんであり、父親のかわいい恋人であったと推測できる。お城という日常の世界では、王さまを代表とする男性の支配下で、この少女は、王さまの定めた掟と規律をたたきこまれ、自分の感情や肉体やエロスから切り離された教育のなかに閉じ込められていると考えることができる。A. ヴァイプリンガー(1995)によれば、「排除されてきたもの、抑圧されてきたものは、小さな女の子によって象徴される。それは、しなやかさ、やさしさ、きやしゃ、やわらかさ、あたたかさ、快活さ、いたずらっぽさ、感情の豊かさ、直観、献身、

率直さ、喜び、愛らしさ、魅力、利口さ、賢明さといった表象をよびおこす」のである。

しかし、お姫さまは、すでに男性社会のなかで、父、つまり王さまの人形としての教育を受け、自分らしさを抑圧、疎外してしまっている。だからこそこの少女は、暗い湿った森の中に一人でいる時だけ、自分を取り戻していたのではないだろうか。その証拠に、まりを泉に落とした時、(金のまりが自分のアイデンティティであった)石のこころを揺さぶるほど大声で泣くことができたのである。そして、少女の根源的な女性性、泉の深みに届くセクシュアリティを発見するこころの旅に出発るのである。

5. 金のまり

「金のまり」はなにを表すのだろうか。「金」は、一般に、天の光や神の英知、神仏のイメージ、知恵や真理を象徴するものである。また、太陽に通じるもので、強さやたくましさなどの男性原理を表すとされる。このことは、このお姫さまと男性性との関わりが暗示されていると筆者は考える。藤見幸雄(2004)は、「姫の自我に遊ばれているまりは、ナルチズムあるいはプライド」と捉えた。しかし、筆者はこの金のまりは全体性の象徴であり、ユング心理学におけるセルフであり、魂であると、考えたい。いいかえれば、お姫さまのアイデンティティそのものであったといえる。

「金のまりをとりだして、それを高くほうりあげては、手でうけとめてあそびました。これがお姫さまにとっては、なによりもたのしいあそびだったのです。」このあそびが、森の中で、すずしい泉のほとりでのみ、なされたことに注目するなら、まりをくりかえし投げるという行為は筆者には、瞑想をしている姿に感じられる。事実、マハリシ派の超越瞑想では、子どもの瞑想においては、眼を閉じることが危険なので開眼のまま、ボールをひとりでなげて瞑想するという。もし、瞑想あるいは祈りの心の状態を表しているとしたら、すべて状況は機が熟したといえるのではない

だろうか。非日常的なこころの森、命の樹、そしてエロスの泉、そして時熟し、魂のまりはいざみにはいっていくのである。このお姫さまのイニシエーションが、まさに始まるのである。つまり、個性化の一歩が始まろうとしているともいえる。

6. カエル

カエルは何を象徴しているのであろうか。まず、思い浮かぶのは、カエルは水の中でも地上でも生きることができるということである。つまり、水の領域と、大気の領域をつなぐ媒介者ということができる。ユング心理学では、水は無意識をあらわすとされているので、カエルは無意識と意識をつなぐもの、あるいは日常と非日常をつなぐものといえる。さらに、おたまじやくしから変態をすることから、変身の象徴、再生とよみがえりの象徴であるといえる。また、カエルは本能や動物的なものの象徴であり、そのぬるぬるした皮膚の感触からは湿った性器（ヴァギナ）が連想される。そして、その性器は新しい命を産み出すところであり、エジプトでは、カエルは出産の保護神とされている。また、カエルは湿地や沼地に棲息し、そこはグレートマザーの聖なる領域である。したがって、カエルは女性性、母性性のシンボルであり、妊娠、出産、官能、性愛と関係し、豊饒性を表している。また、中国ではカエルは、暗く湿った女性の領域「陰」の原理の象徴とされている。

この物語では、カエルは、無意識と意識をつなぐものであり、女性性、母性性やエロス原理を引き受けるものととらえたい。また、変化発展を暗示するものといえよう。また同時に、「きみのわるい、ふくれた頭を水の中からつきだしている」という表現から、ペニスが暗示され、性愛と、アニムス的要素が含まれているとも受け取れる。元型は対極、あるいは双極であらわれることを考えれば、このことは矛盾はない。

この物語において、女性が根源的な女性性を発見し、自らのものとして受け入れていく

ためには「カエル」との出会いが絶対に必要であったと強調したい。ひとつの側面は、グレートマザー的なるものとのつながりを必要とするのである。いいかえれば、豊穣な泉の湿気、生命のエネルギー、大地的な、母性的なものを自らの内面に発達させねばならないのである。もうひとつの面は、アニムスとの出会いと統合であろう。この物語のカエルは年をとり、気味が悪く、醜く、あつかましく、支配的である。太陽でさえ、まぶしく感じるほど、美しく、輝く若いお姫さまが、反対の、醜い年寄りのアニムスと出会い、対決する物語と、筆者は捉えたい。

7. 関係性

金のまりが泉の中に落ちてしまい、大声で泣き叫ぶことによって、カエルとのかかわりが、はじまる。感じ方、感情表現は人それぞれであり、まさに感情はその人の個性であるといえる。お姫さまは、固く、動じない意志までが、こころを搖さぶられるくらいに、全身全霊で、泣いたからこそ、泉の奥深くに沈んでいた（実は魔女に捕らえられていた）カエルの耳に届き、カエルが現われたのであった。そして関係性が始まるのである。つまり、金のまりの時が熟し、姿をかくしたまりを、全身全霊で、求めたからこそ、イニシエーションのプロセスが始まったといえる。

また興味深いのは、お姫さまは、まりをとつてきてくれたお礼に、着物でも、真珠でも、宝石でも、金の冠でもあげるというが、カエルは、そんな物質的なものはいらないと言う。カエルが欲しいのは、愛情や親密さが欲しいと言う。そして特別な友達か遊び仲間にして欲しいというのである。人間が欲しがるような物質ではなく、こころや関係性を求めるのである。感情と関係性、つまりはエロスを求めるのである。

8. 階 段

大理石の階段をピチャ、ピチャ、とはいあがるシーンは不気味な迫力がある。階段は、

ライフサイクルや、理想と関係がある。秋山さと子（1982）は「昔と今と未来をつなぐところに意味がある」と言う。とくに、のぼることは、精神的な世界への階段である。この物語では森から人間世界へ向かって上っていくのであり、姫との関係を求めて、新しいこころの世界へはいるためにのぼるのである。意識と無意識をつなぐためという言い方もできる。影の世界から光の世界へやってくる。そして、その境界としての扉が開かれるのである。

9. 王

「王国」や「王さま」などの象徴がメルヘンの世界で、重要な働きをしていることがある。このメルヘンでも、王さまの役割は大きい。王は神に近い存在であり、国の統治者である。つまり国全体の秩序を守るべき役割になっている。ここでは男性原理、父性原理をあらわし、約束を守るという秩序の体現者である。そのためには、かわいい娘にでさえ、厳しく、冷たくルールを守らせるのである。また、父親自身が、感情面、女性的側面を発達させていくなくて、権威にとりつかれていて、強い力を娘に行使しているともいえる。また、王さまのかわいいお人形のような、まだ子どもとしてのお姫さまは、父親コンプレックスに縛られていて、エネルギーの多くを内面にひきこんだままである。

10. 怒り

この物語では、クライマックス（転）の部分において、お姫さまが激しい怒りを表している。「お姫さまは本当におこってしまいました。そしていきなりカエルをつかみあげると、ありったけの力をこめて、壁にたたきつけました。」このような攻撃性、不安、怒りというような激しい情動は、私たちの文化では、悪として認められないものである。

ある女性は、このメルヘンの、「このお姫さまの怒りとカエルを投げつける箇所がどうしても、受け入れられない」と述べ、「このお姫

様の人格を疑う」と語った。この言葉に一般的な女性に対する見方が表れている。グッゲンピュール・クレイグ（1982）は次のように述べる。「われわれは攻撃性と男性性を同一視する一方、非攻撃的なエロスと結合した女性性をみすぎてきた。二十世紀においてもなお、男の一生を破滅させ、殺してしまう女性的なものの元型を人々はまとも見たがらないのである。」つまり、男性と女性との関係において、われわれは男性の破壊性や攻撃性は認めるが、女性の殺意や、攻撃性は受け入れられず、病的なものとみなされてきたのである。この女性の発言にも、そのことが表れている。しかし、ヴェレーナ・カースト（2002）は、いわゆる悪という「この情動には、本質的なものが隠されており、少なくとも非常に大きなエネルギーと結びついている」と述べている。鈴木研二（2004）は日本の昔話「一寸法師」と「田螺息子」を取り上げて、次のように分析している。「この田螺もしまいに立派な男になるのである。そのきっかけが興味深い。嫁さんにふみつぶされたり、自分から藁打ち石にのって、娘に杵でつぶしてもらうのである。すると、オトナの男に変身する。」「こういう場合のお姫さまや娘は、決して聖母・慈母ではない。若者や男に対する娘・女としての女性 ヘライラ である。それが思わず、あるいは頭にきて、一寸法師を踏みつぶす。杵や小槌でゴツンとやる。ただし、鬼のような悪意や意図はない。対等な立場の女として、一寸法師のオトナの男としてのもの足りなさを、つい指摘してしまったのである。」ここでとりあげられている話が日本昔話であるためか、筆者の人柄からきているのか解釈も穏やかで、きびしくはない。女性に対する見方もきわめてやさしいという印象を受ける。そこに女性に対する日本男性の期待、偏見を見ることができる。女性は男性に対して、やさしくなければならない、やさしいはずであるという偏りである。肯定的母親コンプレックスによる甘えといつてもよいかもしれない。

しかし、女性の魂には男性の期待を裏切る

のような多くの側面がある。A. ヴァイプリンガー（1995）は「暗い女」の中で大地の女神、冥府の女神であるメディアをとりあげ、次のように語る。「メディアは、美しい女魔法使いで、ヘリオス神の孫娘である。彼女は、夫のイアソンが自分を見捨てたとき、恐ろしい殺人者になり、自分の競争相手とその父親ばかりでなく、イアソンとの結婚によって生まれた自分の息子たちまで殺してしまう。あらゆる女性の中に隠れている力が、このメディアのなかであらわになる。それは、感情が害された時に目覚める、復讐のエネルギーだ。メディアの神話からはまた、当時の女性の置かれていた状況、今世紀にいたるまで延々と続いている状況が読み取れる。」「それはいかに強く抑圧され、否認されようとも、女性のなかに身を隠し、現われる機会をうかがっているのだ。すべての男性が戦士を自分のなかにもっているように、全ての女性のなかには殺人者であるメディアが住んでいるのである。」筆者は、前論文（2002）において意識から疎外され、抑圧された女性性を救済することを述べた。今回はその女性性とは、肯定的、善のみではなく、否定的側面、闇の面、殺人者、魔女などの暗い女性性、闇の女の側面にも光を当てたいのである。なぜなら、私たち女性は、全体性を意識し、全体性を生きたいからである。全体性とは、完璧であるということではなく、自分自身のすべてを生きたいということである。否定的なものを無意識の暗い空間に閉じ込めてではなく、暗い、底なしの泉の深みに存在する醜いカエルと出会い、対決すること、そして自身と関係づけることが今後の女性にとっても、男性にとっても必要なことである。

以上のことをお姫さまが体現している。父親のかわいいお人形を演じていた少女は、どこか窮屈で、自分らしくないと感じていただろう。しかし、王さまの命令は絶対であり、正義である。どこも間違ってはいない。従わざるを得ない。生まれてこの方、ずっとそうしてきた。逆らったことなど一度もない。

「約束は守らなければならない」。我慢をした。カエルの要求は王さまの権威をかさにきて、エスカレートしてくる。強引で、権威的で、狡猾きわまりない。自室に入り、王さまの目の届かないところということもあったが、お姫さまの押さえつけられてきたエネルギーがついに爆発した。感情が噴き出てきた。ずうずうしい支配的なカエルに対する怒り、そして理不尽な王さまに対する怒りが、極限に達した。正義なんてどうでもよかった。どうして自分はこんなに支配されなくてはならないのか。こんな醜いカエルの言いなりにならなければならないのか。カエルの言い分は性的関係の要求もある。もう我慢はできない。なにがどうであれカエルを目の前から消したかった。カエルを殺したかった。生まれてこの方、このお姫さまが体験したことのない激しい情動であった。カエルとの対決である。そして、それは自分自身のなかの醜い面との対決でもある。積極的な対決としての怒りということができる。「いやだからいやだ」という論理的ではない直観や感覚と結合した感情の行為において、女性の創造活動が本来的に活動し、人間関係を揺さぶるのである。まさに、このメルヘンでは、お姫さまが自分を取り戻し、自分に正直に自分をさらけ出し、父親の支配も断ち切り、一人の人間として全体として、怒りをあらわし、カエルを投げつけるという殺人的行為によって、彼女自身も父親から自立し、カエルにも向き合い、そのことがカエルの魔法を解き、自立した人間として、アニムスとの関係が始まるのである。お姫さまにとっては、閉じ込められたアニムスの解放とアニムスの自覚がきっかけとして、少女から一人の女性としての変容のプロセスに移行したことができる。

11. 壁

壁というと障壁や、防衛的な壁を思いがちである。しかし、壁は外の敵や危険から守ってくれるものである。ユング心理学では、グレーート・マザーや女性原理をあらわすとされ

る。この物語では、壁の役割は大きい。壁の内側でお姫さまは、正直なこころのたけを吐き出し、カエルをなげつけることができたのである。そして、壁がカエルを受け止めたのである。保護し、受容してくれる容器の役割、つまり母なる働きをして、お姫さまとカエルの変容に立ち会っているのである。まさにセラピストの役割に似ている。

12. 王子、8頭立ての馬車

王子はアニムスの象徴であるととらえることができる。お姫さまがまだ少女に属し、父親の人形である時、つまり母的な豊穣性やエロスやセクシュアリティに自覚めていない時、アニムスはグレートマザーと一体化し、暗い無意識の奥底に捕らえられている。そして、少女が、ひとりの女として、自己を主張するとき、アニムスは変容することができる。父親の王さまの権威に反抗し、心理的な父親殺しがなされたといえる。その意味では、この王子はお姫さまの新生の自我を意味するものである。またお姫さまとの結婚により、お姫さまの魂との統合がめざされる。結婚により、王子は若い王さまとよばれ、新しい世代が誕生する。若い王さまは死と再生の主題であり、新しい洞察が生まれたことを示している。8頭立ての馬車の8はユング心理学では、調和と完成をしめす4の倍数であり、8は地上の秩序と天の秩序の統合を示すと考えられる。ここに、お姫さまはグレート・マザーに属する自然のもつ生命性・エロスとアニムスの知性・精神性スピリットを手に入れたわけである。

13. 魔女

魔女は、男性支配の社会においては、忌み、嫌われ、恐れられる。それは現代においても同様である。

土沼（2002）で考察したように、拒否されたものの、排除されたもの、追放されたものはすべて醜く、邪悪になってしまう。

14. ハインリッヒ

B. シュロダー（1978）においては、ハインリッヒは白髪で白く長いひげを持つ老人として描かれている。その忠実さは、主人に対する服従の愛を超えて、神の愛さえ感じさせるものである。カエルになった王子が泉に沈んでいくのを悲しく見守り、王子の変容を我慢強く、信じて待ち続けた。それだけでなく、胸が張り裂けるほど、胸に鉄の輪をはめねばならないほど悲しみつつ、人生をかけて待っていた。この姿勢は、辛さに共感しつつ、そこから逃げず、本人が変化していくプロセスにつきそうセラピストの姿勢にも通じている。ハインリッヒが老人であると仮定すれば、そこに老賢人の姿を見出すことができる。ハインリッヒの登場により、お姫さまは若いアニムスのみではなく、さらに精神の次元、靈的な次元、自己への成長が暗示されているといえる。そういう意味では、金のまりに始まり、アニムスと出会い、個性化の道に足を踏み入れたということができる。

15. まとめ：結婚 アニムスの統合と女性性の目覚め

メルヘンは、子どものためだけではなく、大人にとっても、深い魅力をたたえている。宗教学者エリアーデ（1971）によれば「昔話が今あるような、形になったとき、未開たると文明化されたを問わず、人びとはよろこんで何回も何回もくりかえし聞いて飽きなかった。このことははじめの筋書きが、昔話のようにカムフラージュされてしまっても、人間の最深部の欲求に答える心理劇的表現であるからだといってよい。だれでも何か危険な状況を体験し、またとないような試練に直面し、他界へ困難を配して進み入ろうと考えている。- そして昔話を聞いたり読んだりすることで、想像の世界で、あるいは夢の世界で、これらを経験しようとするのだ」と考えられる。

ユング心理学では、夢解釈において、夢の

進行を4場面に分けることを勧める。このことはメルヘンを話の進行にそって起・承・転・結と見ていくことによって心理的変容のプロセスがより明確になると考えられる。起は「のぞみが何でもかなった時代」「暗い森とすずしい泉」というように、非日常、非現実、無意識の世界に入っていくことが暗示される。お姫さまは、すでに、個性化の過程に入りそうなことが暗示される。それぞれの象徴的表現の解釈はすでに述べたので、紙数の関係からここでは、省略する。ここでは主なものだけ取り上げたが、もっと細かく見ていくことも可能である。たとえば、ハインリッヒの胸輪はなにをあらわしているのだろうか。抑圧された王子のこころ、あるいは今まで枠にはめられてきたお姫さま（女性）のかせかもしれない。この論文では、女性性の回復のための、アニムスの統合そして、女性が女性の全体性を取り戻すための、セクシュアリティ、とエロス、母性について、カエルの象徴的意味から考察した。これまで押し付けられた「女性的な」というものに苦しめられている女性たちが、もっと楽に自分自身を表現していくことに、勇気を持つことができるることを願いたい。このメルヘンは、お姫さま個人の内的な物語であると同時に、女性のための普遍的な物語でもある。また王子との結婚は個人の内的変容のプロセスであると同時に二人の男女の結婚の物語と解釈してもよい。いずれにせよ、アナとアニムスというような対立したものが、親密になり、同居する時には、きちんと対決し、意識化していいう作業が必要である。それによって眞の関係、個性化を作る能力を獲得することができるといえる。P.シェレンバウム（1998）は「破壊性を愛との関連において見ることだけが私たちを救ってくれる。」「破壊行為は愛の心理的前提出り、しばしば愛を成立させる」と述べている。このことは、お姫さまの激怒とカエルを投げつけるという象徴的行為が王子を救い、お姫さまの自立につながるということクライマックスについても言えることである。正直な対等

の関係だけが、人間を成長せせると言いたい。一言で言えば、このメルヘンのテーマは、他のメルヘン同様に欠けているもの、排除されてきたもの女性性の再統合ということができる。最後にスイスの分析心理学者グッゲンビュール・クレイグ（1982）のことば「結婚というものはそもそも快適でも調和的でもなく、むしろそれは、個人が自分自身及びその伴侶と近づきになり、愛と拒絶をもって相手にぶつかり、こうして、自分自身と世界、善、悪、高み、そして深さを知ることを学ぶ個性化の場なのである」で終わりにしたい。

参考・引用文献：

- A. ヴァイプリンガー（1995）おとぎ話にみる愛とエロス（入江良平・富山典彦訳）新曜社
- A. グッゲンビュール・クレイグ（1982）結婚の深層（樋口・武田訳）創元社
- B. ベッテルハイム（1978）昔話の魔力（波多野・乾共訳）評論社
- C. A.マイヤー（1993）ユング心理学概説、個性化の過程（河合隼雄監修）創元社
- 土沼雅子（1994）夢と現実 - ユングとともに自己と出会う 二期出版
- 土沼雅子（2002）女性のスピリチュアリティ序説 女性性の回復にむけて（人間科学研究第24号）文教大学人間科学部
- 藤見幸雄（1999）痛みと身体の心理学 新潮社
- J. グリム・W. グリム（1997）初版グリム童話集（吉原高志・吉原素子訳）白水社
- Jacob and Wilhelm Grimm（1978）THE FROG PRINCE（translated Naomi Lewis）north - South books
- ヘルムート・ハルク（1992）木の夢（渡辺 學）春秋社
- M. エリアーデ（1971）生と再生（堀 一郎訳）東京大学出版会
- M. ヤコーピ、V. カースト、I. リーデル（2002）悪とメルヘン（中山康裕監訳）新曜社
- 宮田光雄（1993）内面への旅 筑摩書房
- 織田尚生（1998）心理療法の想像力 誠信書房
- P. シェレンバウム（1998）愛するひとにノーをいう（林道義・島田洋子訳）あむすく
- 鈴木研二（2004）見られる自分 マザ・コンと自立の臨床発達心理学 創元社